



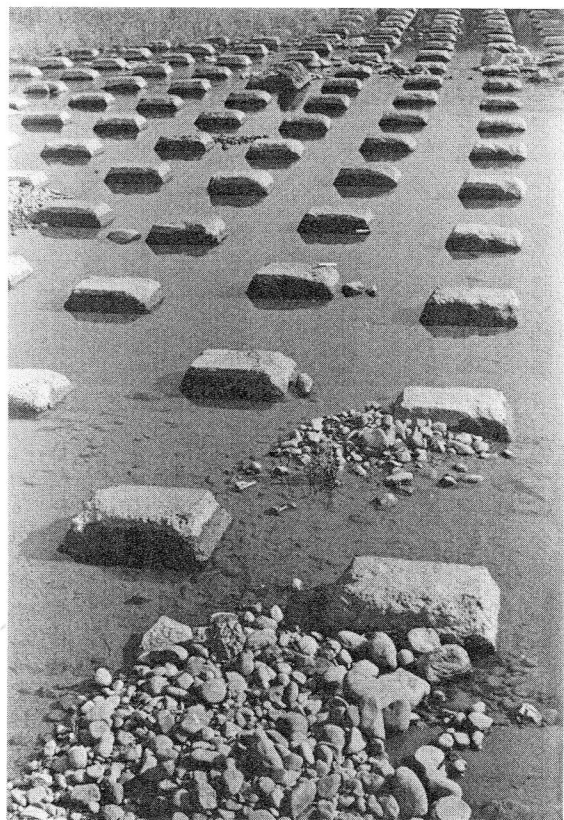
# 一年の計、一生の計


 やまもと まこと  
 山元 眞 神父

一年の計は元旦にあり。一生の計は？

新年早々、縁起でもない！という声が聞こえそうだが、一生の計は今日にあり。なぜなら自分の人生は今日で終わりかもしれないから。明日も生きていくという保証はどこにあるだろうか。どこにもない。誰かが保証してくれるだろうか。誰も保証してくれない。

新年を迎え、一年の計画を立てる。今年はどうしよう。今年こそはこうしよう。年末には満足できるように、きちんと計画を立てて、悔いのないように一年を過ごそう。とだれでも思うもの。



だが、今年もまた年末を迎えることができるかどうかは、その時になってみなければわからない。はっきりしていることは、今、生きているということと、

明日はどうなるかわからないということ。とすれば、今日が一生の終わり。今日がわたしの人生の終わり。

この終わりを積み重ねて一生

がいつか終わってしまう。明日かもしれない。あさってかもしれない。来週かも。来月かも。来年かも。確実なのは今。確実なのは今日。しかも、その今日でさえ、今日の終わりまで生きているかどうかかわからない。人は今日を積み重ね、小さな「さよなら」を言いながら、大きな、最後のさよならに近づいていく。つまり…一生の計、まとめは今日。

歳を重ねると、それだけ死と出会うことが多くなる。「会うは別れの始めなり」という諺があるが、新しい出会いは減り、別れが多くなる。だんだんと…自分が死ねば、それですべては

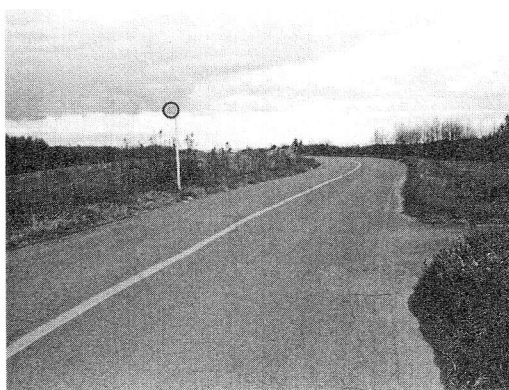
終わり。一気に皆と別れることになる。死によって出会いはゼロになり、別れがすべてとなる。

人生五十五年。司祭になって二十八年。いろんな死に出会ってきた。自然死。病死。事故死。幼い子もいれば、高齢の方もいる。司祭としても通夜、葬儀を司式したり、参加したのはゆうに一〇〇回は越えているだろう。

遺体を前にする度に思い、感じることもある。「この人は生きていた」「この方は今、新しくまた生き始めた」と。それは確信であり、すべての人の亡きがらを前にして強く感じることである。人は死んで無になるのではない、と。

「わたし」は初めはなかった。初めは「無」であった。この世に生を受け、「有る」ものとなった。これは不思議。神のみが「無」から「有」を創り出す。こうして、わたしという存在はこの奇跡から始まる。命そのものから命を分けてもらって今がある。その命は永遠の神から与えられ

たもの。それゆえ、命には終わりはない。この世は「有」の世界。すべて有るものは死によって無くなる。この体は無くなる。しかし、命は続く。そのように信じているし、実感することができる。



イエス・キリストは言う。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる」(ヨハネ福音書)。

不確実な時代といわれて久しい。明日はどうなるのか読めない。時が、時代が、読めなくなっている。しかし、いつの時代

であつても確実なことがある。それは、生きているものは必ず死ぬということ。誰も否定できない、もつとも確実なこと。とすれば、このことを基盤にして生きていくことが確実な人生を築くことになるのではないか。

もし、今の自分を変えたいと思うならば、もし、自分の人生を変えたいと思うならば…自分は死ぬものだと考え、それを認めるといいのではないか。明日から、いや今日から何かがかならず変わらなと思う。

もつとも確実なことなのに人はあたかも死なないものであるかのように振る舞う。その結果、「今日一日」という時が無意味に過ぎ去っていく。「今日」しかないとしたら、人はどのように「今日」を生きているのだろうか。「一生の計は今日にあり」。

【教会ホームページ】

[http://www.](http://www.yukuhashi.catholic.ne.jp/)

[yukuhashi.catholic.ne.jp/](http://www.yukuhashi.catholic.ne.jp/)

【ブログ】

<http://micheleyan.exblog.jp>



株式会社 吉本洋紙店

本店 〒104-0041 東京都中央区新富2-7-4  
厚木支店 〒243-0807 神奈川県厚木市金田1017

☎03(3551)4141(代)/2143 FAX03(3551)3939  
☎046(223)6931 FAX046(223)6930